

福岡大学医学会ニュース

医学部在職中の思い出

福岡大学退任にあたって

福岡大学名誉教授 江崎 廣次



その活動も次第に充実しつつあると思っています。

私は福岡大学に参りましたのは、昭和四十九年四月です。二十二年間お世話になりました。その間、多くの方々に色々と厚情を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。

福岡大学医学部は、二十五年目を迎えて、愈々その真価が問われる時になりました。九州大学にも、久留米大学にもないユニークな医学部としての存在意義を持ちたいものと思います。本医学部卒業生も二〇〇名を超えたところで、二十一世紀に向けて、日本の医学・医療を支える大きな力となつていきます。

私は福岡大学医学部の庶務幹事として、最近二年間、四回の例会を企画して参りましたが、その仕事を通じて感じたことを述べたいと思います。本医学部は昭和五十四年一月三十一日、医学部臨床大講堂において創立総会を開催し、第一回例会（学術集会）が行われ、以後毎年、総会（七月）および二回の例会（一月と七月）が開催されています。医学部活動の目的は、会員間の研究の相互理解と交流研鑽を通じて、医学部の一層の充実と研究の発展をはかり、医学の進歩発展に寄与することにあると見做されています。昭和五十六年四月、医学部新講義棟が完成したことを記念し、医学部全学生を対象とした講演会が開催されました。そのメインテーマは「福大に医学の殿堂を」とあり、講演者の一人として、私は医学部を前に「萌え出るもの」と題して話を進めました。七隈の地名は、古代より伝わるもので、ここから能古島や博多湾を眼下に望むとき、玄海灘から黒潮の流れにのって、七つの海へ、シルクロードへ、日本の門戸として常に萌え出る文化の起点であつたろうかと思われまふ。地の利を得今ここに生きる私は、諸君とともに視野を広げ、日本の、世界の医学の殿堂をめざして、もたらしたいと訴えました。

最終講義は「衛生と生活習慣」と題して去る一月十一日に行いました。人の健康は、日々の生活の中で築き上げられ、守られ、そしてまた害され、生活は離れた健康はあり得ない、生活を無視した健康もあり得ないと思ひます。毎日の営みの中で、知らず知らずのうちに、生活習慣が出来上がっています。従って健康維持、増進する視点から生活習慣を述べました。将来医師として二十一世紀の国民の健康・医療に従事する職業人として、自己の生活習慣を正し、もって健康教育と保健指導に当たってもらいたいと念じています。当日学生に強調した健康維持習慣は、①喫煙しない②定期的に運動する③過度の飲酒をしない④適正体重を維持する⑤適正な睡眠時間（七～八時間）をとる⑥朝食を毎日食べる⑦親類、友人との交際が密であるなどでありまふ。

予防の第一段階としての健康増進のために、衛生的な生活習慣を自ら実践しなければ、他の人に健康教育と保健指導をする資格はないものと思ひます。福岡大学医学部・病院が二十一世紀に向かって前進、発展していくためには、教職員学生一体となつて、さらなる活躍が望まれるところであります。そのためには、教育、研究、医療の三者を通じてお互いを良く理解し合うことが重要な課題であります。福岡大学医学部こそ、その場であり、学会創立の趣旨もそこにあります。今後の学会の発展と皆様のご活躍を心から祈っています。そして例会に出席して新しい知識にふれ、私自身をリフレッシュしたいと思っています。

退任のご挨拶

福岡大学名誉教授 坂本 公孝



平成八（一九九六）年三月三十日、がらんとした教授室で三好医学部長から「辞職を承認する」と記された一枚の紙を手渡され、二十三年間にわたる福岡大学の生活が終りました。三月中は、授会や同門の方々から送別慰労会とか退職祝賀会とかの名目で、晴れがましいセレモニーの主役は祭りあげられましたが、最後は誠にあっけない幕切れでした。

長いようであつたという間の二十三年間で、まがりなりにも教室の主宰者としての任務を遂行できたのは、多くの先輩、同僚の皆様のご支援のおかげで、ここに改めて謝意を表させていただきます。福岡大学医学部泌尿器科学をやる資格はないものと思ひます。

福岡大学医学部・病院が二十一世紀に向かって前進、発展していくためには、教職員学生一体となつて、さらなる活躍が望まれるところであります。そのためには、教育、研究、医療の三者を通じてお互いを良く理解し合うことが重要な課題であります。福岡大学医学部こそ、その場であり、学会創立の趣旨もそこにあります。今後の学会の発展と皆様のご活躍を心から祈っています。そして例会に出席して新しい知識にふれ、私自身をリフレッシュしたいと思っています。

間でもつとも誇りに思っていることは、泌尿器科を専攻する仲間が多数集つて来て下さったことである。前述の如く、わずかに三名でスタートしたわけですが、初年度から他学の卒業生が参加して下さり、本学出身者が卒業後研修を始めるようになってからは毎年平均二、三名の新入局者があり、一九九五年末までに教室に在籍した人の数は六十名を超えました。うち四十数名は学会認定専門医の資格を有し、二十名近い人は学位を受領しています。超高齢化社会を迎えつつある今日、泌尿器科専門医の果たす役割はますます大きくなりますが、これらの人たちがその中核となつて社会に貢献して下さることは疑いの余地がなく、私にとつては教師冥利につきるといっても過言ではありません。

対馬二十五周年

福岡大学筑紫病院 耳鼻咽喉科前教授 調 重 昭



昭和五十二年（一九七七年）七月十八日から二十三日までの六日間、朝日新聞西部厚生文化事業団の創設三十周年記念事業として対馬総合無料診療が実施された。この事業の遂行には全面的に福岡大学が協力し、医学部・大学病院から九診療科の医師、看護婦、事務職員と医学部学生二十五名が参加した。この巡回診療には、西園医学部長が団長となり、朝日新聞からは蔵敷さん、福大からは対馬のことを少し知っている（？）ということで先導をつとめさせてもらった。

対馬は福岡の北西約二二〇キロメートルの朝鮮半島と目と鼻の先の玄海灘の中に浮び、佐渡・奄美大島に次いで大きい離島である。南北八〇キロメートル、東西一八キロメートルの殆ど全島を山々が覆い、山裾が海に落ちて溺れる島に約五万三千人（当時）が住んでいる。

この巡回診療を巡る六年前の昭和四十六年九月に福岡大学医学部設立のための香椎病院（旧九電病院）に九大より赴任した直後から対馬との関係がはじまった。はじめは係がはじまった。はじめは木・金・土と週末の三日間を九州郵船の対馬丸（八〇〇トン位）に七時間ほど揺られて往復していた。嵐で船が出なかつたり、壱岐で一泊したり、対馬出張を楽しんでいた。暫くして、常勤医が強く望まれた。診療の方は必ずしもベテランとはいえない若手・大学院生が入れ替わりたれ替わりするので、一人位は固定医が居ないと駄目だということに、福大産婦人科、小児科が引き揚げたあとも、平成七年末迄月一回は海を渡り、現在も尚送・エンジンの音・船先に波のくだける音など、旅のほろ苦さを思い出させる音として記憶に残っている。夏休みなど滞在を数日延ばして岩浜で泳いだり、浅茅湾に古藤先生と釣りにいったり、ジムニーで島内を駆けめぐったり、白嶽や御岳に登ったりした。

第一回の福大巡回診療の時は国立対馬病院は、まだ以前の陸軍病院のあと地にあり、患者さんのあふれている状態を通過して竹村院長や松浦先生に挨拶にあがった。三年後の第二巡回診療は上島四名の検診でメニール病一五名の良性発作性頭位めまい九名の他、計二十五名のめまい患者を診断した。検診および国立病院では、めまい患者の他に悪性腫瘍の発見にも努めた。聴神経腫瘍・頭静脈球腫瘍の各一名は寛解状態にもつて受け、当人の結婚問題迄相談を受けたことがある。食道癌一名・上頸腫瘍と咽頭腫瘍の各一名はいずれも進行例で、生存者が少ないのは残念である。

自然環境に恵まれ、第一次産業に従事する者が多い対馬では医療疾患の数も少なく、めまいやふらつきなどの訴えが疾患に結びつかないのではなかつたかと思つた。然し二十五年近くたった現在は、耳鼻科疾患のみではなく、一般的にいつても疾患数や種類に對馬特有のものは殆どなく、患者さんを含めた住民のニーズと医療関係者との信頼関係で表面上の数が左右されるだけであつたと、ごく当り前の事を感じている。

（平成八年三月）

アマの間違い、プロの間違い

泌尿器科学教授 有吉 朝美



は、漢字の読み書き、解釈の問題などがよく出題されている。それなのに言葉の大ベテランにしてこの誤りがあることに、理解しがたい一種の衝撃を受けた。

先日、母校同門会での講演会で、報道に關しての面白い話を聞く機会があった。事件について報道する際、何が真実なのか判断が難しい実情や、オフレコなどについての報道モラルの話など、とても面白かった。日本は世界で唯一の文盲のない国であり、国民の読み書き能力の育成には、新聞とその宅配制度が大きく貢献している、と自賛された。なるほど同感であったが驚いたのは、マスコミの重鎮である講師が「モンモウ」でなく「ブンモウ」と発音されたことである。報道関係では正しい言葉の使い方が厳しく要求される筈だし、入社試験で

（シタツツミ）という銘菓がある。近ごろでは、「おいしくて舌ツツミをう」と言う人が増えているようである。こんな発音違いは、時代とともに変遷し、いずれ正しい発音として承認されるかもしれない。ついでに、このお菓子には宮内庁御用達と書いてあるが、「ゴヨウタシ」を「ゴヨウタツ」と呼ぶ人は意外に多いのではないだろうか。素人の間違いは、知らなかつたからとか、笑い話として誤魔化すこともできようが、プロの間違ひのは見過ごされない問題であろう。初めに紹介した話もそうであるが、以前にも同じような経験をして驚いたことがある。それは、七十六年ぶりに現れたハレー彗星についての講演会を聴きに行った時のことである。年配の天文学者が、地動説を唱えたコペルニクスのことを「コペルニスク」と言うのを聞いてビックリ。耳を疑ったが、繰り返そう言っているのを果れてしまった。私たちが、エベレスト山を「エレベスト」と言い間違えたり、父の郷里、山口市を舌鼓

教室紹介

福岡大学生化学第一

本教室は、一九七三年四月大阪大学医学部薬理研究施設より松岡雄治教授が赴任され開設した。その後、渡辺繁幸、私設秘書として野田みほ、の十五人です。研究の方は、癌胎児性抗マーカーを中心に腫瘍LAK細胞に組み込む一種の癌の遺伝子治療に取り組んでおり、院生の仙波、山本、富田、別府が活躍しています。

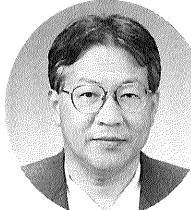
立石と名取グループは、消化管ホルモンを手掛け、抗原の分子構造と抗原構造を明らかにしてきました。現在では、黒木（政）と荒川を中心とするグループが、CEAやG733-2に特異的なキメラ抗体を作製してCEAやG733-2に特異的な早期画像診断とミサイル療法的基础研究を行っており、抗体遺伝子を抗腫瘍活性を有するLAK細胞に組み込む一種の癌の遺伝子治療に取り組んでおり、院生の仙波、山本、富田、別府が活躍しています。

自己紹介

平成七年十一月以降に昇格又は就任

衛生学教授

畠 博



昭和四十六年に岡山大学を卒業し、卒業後しばらくして高知県の僻地の中核病院に勤務しました。当時は脳卒中の死亡率が死因の第一であり、高知県は全国でも有数の脳卒中多発県でありました。脳卒中のために寝たきりになった患者さんが病院にも家庭にも溢れていました。予防は治療に勝ること、高齢化社会における在宅ケアの大切さを身を持って実感しました。脳卒中を予防するために、地域巡回検診、栄養指導、減塩運動などをかなり精力的に行いました。また、施設園芸やチェンソーによる伐木作業、あるいは出稼ぎ労働により、ハウス病や振動障害やじん肺に罹患した人が多くみられ、こうした人達の検診にも飛び回りしました。この高知県での四年間の経験がその後の研究の方向を決定づけました。

森園 哲夫



昭和三十五年九州大学医学部を卒業し、同耳鼻咽喉科医局に入局しました。昭和四十七年七月から西九州大学医学部教室研究員（聴覚電気生理学専攻）、西九州大学チャイルドナー病院耳鼻科チーフレジデント、パリス・メディカルセンター耳鼻咽喉科提携外科医、生理生化学室客員講師、福岡連邦政府の医学研究員を経て昭和五十一年にマスターオブサイエンス（MS）の学位と西九州大学（UJ）の学位と永住権を取得しました。昭和五十二年七月から米国ミネソタ大学助教授（耳鼻咽喉科）、聴覚電気生理学研究室主任、五年後にミネソタ大学準教授及び大学院教官、同大学側頭骨病理研究室副主任を兼務し米国永住権も取りその間一貫してNHKのグラントを取得してきました事を誇りに思っています。平成五年七月帰国し福岡大学助教授、平成八年四月一日から福岡大学教授に任命され、筑紫病院の耳鼻咽喉科で勤務致しております。

病理学第二助教授

トート・チボール



この度、福岡大学医学部病理学第二講座の助教授として赴任しました、トート・チボール（Tott Chibor）と申します。ハンガリー出身の四十三才です。ハンガリー医科大学を一九七七年に卒業して、病理学者としては一九八一年から勤めています。腎臓病理学の研究を始めたのは一九七五年からです。昨年暮れ、日本に来る前までは、ハンガリーの国立腎臓センターで助教授として勤めていました。その前に一九八九年から一九九一年まで、Visiting Scholarとして福岡大学医学部病理学第二講座の竹村教授のもとで二年間余り仕事をしました。一九九四年にはシカゴ大学医学部でも短い期間で研究が研究を続けていました。竹村先生や研究室の皆さんとこれから一緒に研究でき、またこれからの全てがうまく行くことを願っています。現在の私の福岡大学での研究テーマは、腎臓での間質性腎炎、特に間質線維化の発現に関する機序の解明です。第二病理の若手研究者とチームを作って、現在、実験を実施しています。

麻酔科学助教授

櫻木 忠和



大島 孝一



昭和五十九年九州大学医学部を卒業後、同大学の第一内科で卒後研修を二年間しました。その後三、四年の予定で、こちらの第一病理学教室に研究をさせてもらいに来ましたが、いろいろと病理のことに興味があるので、仕事をさせてもらっているうちに十年が過ぎてしまいました。この間、悪性リンパ腫の仕事、とくにATL、田口ウイリス、T細胞受容体遺伝子の解析を中心に行なってきました。この間の遺伝子関連の研究の発展には、目をみはるものがあり、PCR、FISHと興味をもって仕事をしていますうちに、時間が過ぎてしまった感があります。平成四年より菊池教授の推薦のもとフンボルト奨学生としてドイツのビュルツ大学（UJ）の学位と西九州大学（UJ）の学位と永住権を取得しました。昭和五十二年七月から米国ミネソタ大学助教授（耳鼻咽喉科）、聴覚電気生理学研究室主任、五年後にミネソタ大学準教授及び大学院教官、同大学側頭骨病理研究室副主任を兼務し米国永住権も取りその間一貫してNHKのグラントを取得してきました事を誇りに思っています。平成五年七月帰国し福岡大学助教授、平成八年四月一日から福岡大学教授に任命され、筑紫病院の耳鼻咽喉科で勤務致しております。

福岡大学の学生のキャリアラムは、ハンガリーなどヨーロッパの制度と大変違っていますが、学生に接し、教えることも出て、大変うれしく思っています。これからいろいろな教育方法を計画して実した日々を送っています。まだまだ未熟ではありますが、今後とも研究、病理診断学、生教育と積極的にこなしていきたいと思っています。なにかとお世話になることと思いますが、ご指導の程宜しくお願いします。

第九十回

医師国家試験

合格者と入局先

平成八年三月十六日、十七日に行われた第九十回医師国家試験に本学から百三十六名が受験し、百七名が合格した。合格率は七八・七％であった。

合格者の研修先(福大病院研修生は科名のみ)は、次のとおり。

上田 真希	内科一	橋内 智尚	奈良県立医大
麻生 宏樹	長大放射線科	橋本 淳一	小児科
阿比留 一	順大耳鼻科	幡手 厳論	熊大耳鼻科
池田真理子	順大耳鼻科	深田裕美子	大阪大内科三
石田 悦嗣	岡大内科一	深見 満愛	健康管理科
一番ヶ瀬 崇	耳鼻科	福井 卓子	内科一
井手 健	小児科	藤沢 基之	整形外科
井手口 博	小児科	藤原 靖子	長大内科二
稲原 芳生	眼科	星野 史博	内科二
今給黎尚幸	外科二	前田 和徳	宮崎大整形
岩下 明子	耳鼻科	前田 好史	外科二
岩谷 美香	鹿大精神科	藤本 満照	琉球大内科三
永川 祐二	筑紫外科	松岡 圭司	佐医大消化器
太田 栄治	小児科	松永 美香	健康管理科
太田 岳暁	筑紫内・消	松本 美保	麻酔科
折津由佳子	小児科	真鍋 剛	整形(形成)
片瀬 香子	熊大内科三		
河野 克之	整形外科		
川畑 貴史	鹿大眼科		
久保田和充	内科一		
久保田修平	産婦人科		
古賀 敬	整形外科		
古賀 正和	筑紫外科		
今野 俊和	外科一		
齊藤 信明	外科一		
酒井 久宗	久大外科二		
佐光 英人	内科一		
佐々木隆光	外科一		
貞元 幸子	九大眼科		
佐藤 雅之	外科一		
杉田 稔	久大眼科		
高村明日佳	長大脳外科		
盧 成吉	筑紫外科		
竹田江里子	眼科		
有吉 志帆	京大消化器内		
(旧姓)堤 壘	科		
富井 一枝	神大産婦人科		
中井 由美	内科二		

教室 便り

学位取得

次の方々は、平成八年三月二十二日付で、福岡大学より医学博士を授与された。

柳 宗賢(解剖学第二)
論文名「カワヤツメウナギ中腎尿管における大食細胞の出現」

江崎 嘉十 耳鼻科
奥村 剛清 内科一
齊藤 信博 健康管理科
関 剛彦 筑紫消化器内
谷口 晴美 内科二
宮崎 堅輔 東京女子医大
形成外科

森本 健三 耳鼻科
江頭 秀人 筑紫消化器内
大西 弘重 泌尿器科
奥村 裕之 京都府立医大
脳外科

神戸 太一 整形外科
高橋 和宏 長大内科三
仲宗根由幸 琉球大外科二
松本 慎二 慶応大小児科
劉 新瑜 耳鼻科
前田 陽夫 熊大放射線科

安部比奈子 放射線科
井田 樹子 放射線科
今給黎和幸 内科一
清瀬はるな 内科二
菅沼 隆 札幌医大小児
科

田中 雅博 耳鼻科
西園正寿男 耳鼻科
松岡 修 内科一
チューリン・眼科
ジャミリアン

陳 英典 外科二
嶋田 充志 大分医大内科
成富 一哉 筑紫外科
西山 守 久大内科一
浦田憲一郎 大分医大産婦
人科

松本 一隆 精神科

須臾 慎也(内科学第二)
論文名「HbE 抗原に対する B 型慢性肝炎患者末梢血 T 細胞の反応-抗原受容体可変部領域の解析」

菅田 耕一(内科学第一)
論文名「肝線維化に対する ウルンデオキシコル酸とケノデオキシコル酸の比較: ラット肝由来の初代培養肝細胞とクニバー細胞による評価」

村上 英毅(内科学第二)
論文名「エラストーゼ誘起性肺気腫に対するコアルロン酸の役割」

堀 孝明(内科学第二)
論文名「MILD EXERCISE INCREASES URINARY DOPAMINE IN MILD HYPERTENSIVES」

張 波(内科学第一)
論文名「Metabolic Effects of Troglitazone on Insulin Resistance in WHHL Rabbits-The Minimal Model Approach to Quantification of Insulin Sensitivity and β -cell Glucose Sensitivity in Rabbits」

西野 一郎(整形外科)
論文名「関節面の開き角を考慮した高位脛骨切り術の矯正角決定法」

加藤 博彦(眼科学)
論文名「未熟児網膜症における増殖組織の病理組織学的検査」

今村 明秀(耳鼻咽喉科学)
論文名「雑音負荷が補聴器装用下の語音聴取に及ぼす影響」

道水 成(泌尿器科学)
論文名「前立腺癌のフローサイトメトリーによる核 DNA 量の検討-とくに内分分泌法による変化とその多様性について」

牧野 康男(産科婦人科学)
論文名「妊娠中毒症における臍動脈および子宮動脈の血流速度波形に対する一酸化窒素(NO)の効果」

迎 雅彦(麻酔科学)
論文名「Inhibition of ganglionic transmission via presynaptic dopamine D₂ and postsynaptic D₁ receptor activation in the canine cardiac sympathetic ganglia」

森 寿治(救命救急センター)
論文名「第二十六回日本腹部救急医学会総会会長賞 症例報告「穿孔を来した胃化学系の変動」」

福岡大学眼科グループ
研究業績: Long-term Follow-up of Visual Acuity in Eyes With Stage 5 Retinopathy of Prematurity After Closed Vitrectomy

古藤 剛(筑紫病院外科)
研究業績「A Study of Lymph Node Metastasis

福岡大学医学部臨床大講堂

福岡大学医学部臨床大講堂

福岡大学医学部臨床大講堂

福岡大学医学部臨床大講堂

福岡大学医学部臨床大講堂

福岡大学医学部臨床大講堂

福岡大学医学部臨床大講堂

福岡大学医学部臨床大講堂

学術交流

海外留学

平成七年十二月以降の海外留学または海外から本学への留学生はつぎのとおり。

①研修先②目的③期間
稗田 洋子(法医学)
①アメリカ、ミネソタ大学
(ミネアポリス)②三環系抗うつ薬中毒の治療を目的とした抗体の作製と有効性の検討
③平成七年十一月一日〜平成八年十月三十一日
飯田 博幸(整形外科)
①Department of Orthopaedics, University of California, USA②手の外科領域のバイオメカニクス③平成七年三月一日〜平成九年二月二十八日(予定)

城島 宏(整形外科)
①Biomechanical Research Laboratory, USA②膝関節領域におけるバイオメカニクス③平成七年六月一日〜平成八年十一月三十日(予定)

リサーチビクター

①所属②目的③期間
朱 錦
①中国、四川生殖医学院(講師)
②発生学とくに精子形成過程の研究③平成八年一月一日〜十二月三十一日④解剖学第一教室

編集後記

本号では特別寄稿として、有吉教授より感想文を寄せていただき、掲載内容を充実させることができました。尚、紙面の都合で新刊紹介および来訪を削除しました。(R・M)

福岡大学医学会 第34回例会の報告

日時 平成八年二月一日(木)
午後三時〜午後五時
場所 福岡大学医学部臨床大講堂

優秀論文賞授与
「アルコール性肝線維症(Ethanol+Iron 投与)ラットモデルにおける脂質過酸化の役割について-特に脂質過酸化の増強に対する抗酸化系の変動」
内科学第一 入江 真

「Epstein-Barr Virus in Gastric Carcinoma in North-West China」
病理学第一 Caicai Ba

「A Study of Lymph Node Metastasis and Recurrence in Thoracic Esophageal Cancer」
筑紫病院外科 古藤 剛

II 講演
1、優秀論文賞の要旨講演
内科学第一 入江 真 医員
病理部 大島 孝一 講師
(現助教)

筑紫病院外科 古藤 剛 助手

2、座長 白日 高歩 教授
「食道癌の外科的治療」
外科学第二 川原 克信 助教授

3、座長 永山 在明 教授
「耳鼻咽喉科におけるめまい疾患」
耳鼻咽喉科学 加藤 寿彦 教授